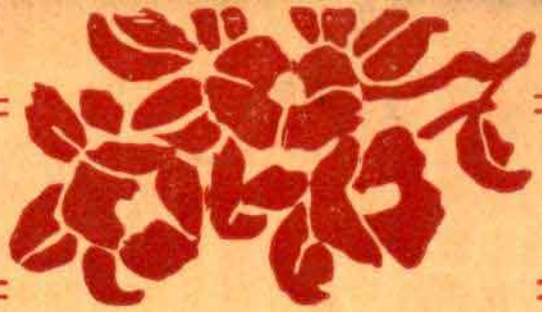

角川文庫
—288—

一房の葡萄

有島武郎

角川書店

昭和二十七年三月十五日　初版發行
昭和三十九年十一月三十日　三十三版發行

定價五拾圓

著作者　有島武郎

發行者　角川源義

印刷者　渡邊龍祐
東京都豐島區西巣鴨二ノ二八六五

角川文庫
葡萄の房一

發行所　東京都千代田區富士見町二ノ七　株式會社　角川書店
振替東京一九五二〇八
電話九段(261)〇二二(代表)

落丁・亂丁本はお取替へ致します

Printed in Japan　　製本・印刷都

一房の葡萄

他七篇

有島武郎

角川文庫

288

目次

一房の葡萄　五
溺れかけた兄妹　一七
碁石を呑んだ八つちやん　二九
僕の帽子のお話　四二
片輪者　五四
火事とポチ　六三
眞夏の夢　八一
燕と王子　九九
解説　坂本浩　二六

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

一房の葡萄

僕は小さい時に繪を描くことが好きでした。僕の通つてゐた學校は横濱の山の手といふ所にありましたが、そこいらは西洋人ばかり住んでゐる町で、僕の學校も教師は西洋人ばかりでした。そしてその學校の行きかへりには、いつでもホテルや西洋人の會社などがならんでゐる海岸の通りを通るのでした。通りの海沿ひに立つて見ると、眞青な海の上に軍艦だの商船だのが一ぱいならんでゐて、煙突から煙の出てゐるのや、檣から檣へ萬國旗をかけわたしたのやがあつて、眼がいたいやうに綺麗でした。僕はよく岸に立つてその景色を見渡して、家に歸ると、覺えてゐるだけを出來るだけ美しく繪に描いて見ようとしました。けれどもあの透きとほるやうな海の藍色と、白い帆前船などの水際近くに塗つてある洋紅色とは、僕の持つてゐる繪具ではどうしてもうまく出せませんでした。いくら描いても〳〵本當の景色で見るやうな色には描けませんでした。

ふと僕は學校の友達の持つてゐる西洋繪具を思ひ出しました。その友達は矢張り西洋人で、しかも僕より二つ位齢が上でしたから、身長は見上げるやうに大きい子でし

た。ジムといふその子の持つてゐる繪具は舶來の上等のもので、輕い木の箱の中に、十二種の繪具が、小さな墨のやうに四角な形にかためられて、二列にならんでゐました。どの色も美しかつたが、とりわけて藍と洋紅とは喫驚するほど美しいものでした。ジムは僕より身長が高いくせに、繪はずつと下手でした。それでもその繪具をぬると、下手な繪さへなんだか見ちがへるやうに美しくなるのです。僕はいつでもそれを羨しいと思つてゐました。あんな繪具さへあれば、僕だつて海の景色を、本當に海に見えるやうに描いて見せるのになあと、自分の惡い繪具を恨みながら考へました。さうしたら、その日からジムの繪具がほしくつて〳〵たまらなくなりましたけれども、僕はなんだか臆病になつて、パパにもママにも買つて下さいと願ふ氣になれないので、毎日々々その繪具のことを心の中で思ひつゞけるばかりで幾日か日がたちました。

今ではいつの頃だつたか覺えてはゐませんが、秋だつたのでせう、葡萄の實が熟してゐたのですから。天氣は冬が來る前の秋によくあるやうに、空の奥の奥まで見すかされさうに晴れわたつた日でした。僕達は先生と一緒に辨當をたべましたが、その樂しみな辨當の最中でも、僕の心はなんだか落着かないで、その日の空とはうらはらに暗かつたのです。僕は自分一人で考へこんでゐました。誰かゞ氣がついて見たら、顏も屹度青かつたかも知れません。僕はジムの繪具がほしくつて〳〵たまらなくなつて

しまつたのです。胸が痛むほどほしくなつてしまつたのです。ジムは僕の胸の中で考へてゐることを知つてゐるにちがひないと思つて、そつとその顔を見ると、ジムはなんにも知らないやうに、面白さうに笑つたりして、わきに坐つてゐる生徒と話をしてゐるのです。でもその笑つてゐるのが僕のことを知つてゐて笑つてゐるやうにも思へるし、何か話をしてゐるのが、「いまに見ろ、あの日本人が僕の繪具を取るにちがひないから」といつてゐるやうにも思へるのです。僕はいやな氣持になりました。けれども、ジムが僕を疑つてゐるやうに見えれば見えるほど、僕はその繪具がほしくてならなくなるのです。

僕はかはいゝ顔はしてゐたかも知れないが、體も心も弱い子でした。その上臆病者で、言ひたいことも言はずにすますやうな質でした。だからあんまり人からは、かはいがられなかつたし、友達もない方でした。晝御飯がすむと他の子供達は活潑に運動場に出て走りまはつて遊びはじめましたが、僕だけはなほさらその日は變に心が沈んで、一人だけ教場にはいつてゐました。そとが明るいだけに教場の中は暗くなつて、僕の心の中のやうでした。自分の席に坐つてゐながら、僕の眼は時々ジムの卓の方に走りました。ナイフで色々ないたづら書きが彫りつけてあつて、手垢で眞黑になつてゐるあの蓋を揚げると、その中に本や雜記帳や石板と一緒になつて、飴のやうな木の

色の繪具箱があるんだ。そしてその箱の中には小さい墨のやうな形をした藍や洋紅の繪具が……僕は顔が赤くなつたやうな氣がして、思はずそつぽを向いてしまふのです。けれどもすぐ又横目でジムの卓の方を見ないではゐられませんでした。胸のところがどき〳〵として苦しい程でした。ぢつと坐つてゐながら、夢で鬼にでも追ひかけられた時のやうに氣ばかりせか〳〵してゐました。

教場にはいる鐘がかん〳〵と鳴りました。僕は思はずぎよつとして立ち上りました。生徒達が大きな聲で笑つたり呶鳴つたりしながら、洗面所の方に手を洗ひに出かけて行くのが窓から見えました。僕は急に頭の中が氷のやうに冷たくなるのを氣味惡く思ひながら、ふら〳〵とジムの卓の所に行つて、半分夢のやうにそこの蓋を揚げて見ました。そこには僕が考へてゐたとほり、雜記帳や鉛筆箱とまじつて、見覺えのある繪具箱がしまつてありました。なんのためだか知らないが僕はあつちこつちをむやみに見廻してから、手早くその箱の蓋を開けて藍と洋紅との二色を取り上げるが早いか、ポケットの中に押し込みました。そして急いでいつも整列して先生を待つてゐる所に走つて行きました。

僕達は若い女の先生に連れられて教場にはいり銘々の席に坐りました。僕はジムがどんな顔をしてゐるか見たくつてたまらなかつたけれども、どうしてもそつちの方を

ふり向くことができませんでした。でも僕のしたことを誰も氣のついた樣子がないので、氣味が惡いやうな安心したやうな心持でゐました。僕の大好きな若い女の先生の仰しやることなんかは耳にはいりははいつても、なんのことだつたかちつともわかりませんでした。先生も時々不思議さうに僕の方を見てゐるやうでした。

僕は然し先生の眼を見るのがその日に限つてなんだかいやでした。そんな風で一時間がたちました。なんだかみんな耳こすりでもしてゐるやうだと思ひながら一時間がたちました。

教場を出る鐘が鳴つたので、僕はほつと安心して溜息をつきました。けれども先生が行つてしまふと、僕は僕の級で一番大きなそしてよく出來る生徒に、

「ちよつとこつちにお出で」と肱の所を掴まれてゐました。僕の胸は、宿題をなまけたのに先生に名を指された時のやうに、思はずどきんと震へはじめました。けれども僕は出來るだけ知らない振りをしてゐなければならないと思つて、わざと平氣な顏をしたつもりで、仕方なしに運動場の隅に連れて行かれました。

「君はジムの繪具を持つてゐるだらう。こゝに出し給へ」

さういつてその生徒は僕の前に大きく擴げた手をつき出しました。さういはれると僕はかへつて心が落着いて、

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

「そんなもの、僕持つてやしない」と、ついでたらめをいつてしまひました。さうすると三四人の友達と一緒に僕の側に來てゐたジムが、

「僕は晝休みの前にちやんと繪具箱を調べておいたんだよ。一つも失くなつてはゐなかつたんだよ。そして晝休みが濟んだら二つ失くなつてゐたんだよ。そして休みの時間に教場にゐたのは君だけぢやないか」と少し言葉を震はしながら言ひかへしました。

僕はもう駄目だと思ふと急に頭の中に血が流れこんで來て顏が眞赤になつたやうでした。すると誰だつたかそこに立つてゐた一人がいきなり僕のポケットに手をさし込まうとしました。僕は一生懸命にさうはさせまいとしましたけれども、多勢に無勢で迚も叶ひません。僕のポケットの中からは、見る〳〵マーブル球（今のビー球のことです）や鉛のメンコなどと一緒に、二つの繪具のかたまりが摑み出されてしまひました。「それ見ろ」といはんばかりの顏をして、子供達は憎らしさうに僕の顏を睨みつけました。僕の體はひとりでにぶる〳〵震へて、眼の前が眞暗になるやうでした。いいお天氣なのに、みんな休時間を面白さうに遊び廻つてゐるのに、僕だけは本當に心からしをれてしまひました。あんなことをなぜしてしまつたんだらう。取りかへしのつかないことになつてしまつた。もう僕は駄目だ。そんなに思ふと、弱蟲だつた僕は

淋しく悲しくなつて來て、しく〳〵泣き出してしまひました。

「泣いておどかしたつて駄目だよ」とよく出來る大きな子が馬鹿にするやうな、憎みきつたやうな聲で言つて、動くまいとする僕をみんなで寄つてたかつて二階に引張つて行かうとしました。僕は出來るだけ行くまいとしたけれども、たうとう力まかせに引きずられて、階子段を登らせられてしまひました。そこに僕の好きな受持の先生の部屋があるのです。

やがてその部屋の戸をジムがノックしました。ノックするとは、はいつてもいゝかと戸をたゝくことなのです。中からはやさしく「おはいり」といふ先生の聲が聞えました。僕はその部屋にはいる時ほどいやだと思つたことはまたとありません。

何か書きものをしてゐた先生は、どや〳〵とはいつて來た僕達を見ると、少し驚いたやうでした。が、女の癖に男のやうに頸の所でぶつりと切つた髪の毛を右の手で撫であげながら、いつものとほりのやさしい顔をこちらに向けて、一寸首をかしげただけで、何んの御用といふ風をなさいました。さうするとよく出來る大きな子が前に出て、僕がジムの繪具を取つたことを委しく先生に言ひつけました。先生は少し曇つた顔付をして眞面目にみんなの顔や、半分泣きかゝつてゐる僕の顔を見くらべてゐなさいましたが、僕に「それは本當ですか」と聞かれました。本當なんだけれども、僕が

そんないやな奴だといふことを、どうしても僕の好きな先生に知られるのがつらかつたのです。だから僕は答へる代りに本當に泣き出してしまひました。

先生は暫く僕を見つめてゐましたが、やがて生徒達に向つて靜かに「もういつてもようございます」といつて、みんなをかへしてしまはれました。生徒達は少し物足らなさうにどや〳〵と下に降りていつてしまひました。

先生は少しの間なんとも言はずに、僕の方も向かずに、自分の手の爪を見つめてゐましたが、やがて靜かに立つて來て、僕の肩の所を抱きすくめるやうにして「繪具はもう返しましたか」と小さな聲で仰しやいました。僕は返したことをしつかり先生に知つてもらひたいので深々と頷いて見せました。

「あなたは自分のしたことをいやなことだつたと思つてゐますか」

もう一度さう先生が靜かに仰しやつた時には、僕はもうたまりませんでした。ぶるぶると震へてしかたがない唇を、嚙みしめても嚙みしめても泣聲が出て、眼からは涙がむやみに流れて來るのです。もう先生に抱かれたまゝ死んでしまひたいやうな心持になつてしまひました。

「あなたはもう泣くんぢやない。よく解つたらそれでいゝから泣くのをやめませう、ね。次の時間には教場に出ないでもよろしいから、私のこのお部屋にいらつしやい。

靜かにしてこゝにいらつしやい。私が教場から歸るまで、こゝにいらつしやいよ。いい？」と仰しやりながら僕を長椅子に坐らせて、その時また勉强の鐘がなつたので、机の上の書物を取り上げて、僕の方を見てゐられましたが、二階の窓まで高く這ひ上つた葡萄蔓から、一房の西洋葡萄をもぎとつて、しく〳〵と泣きつゞけてゐた僕の膝の上にそれをおいて、靜かに部屋を出て行きなさいました。

一時がやゝ〳〵とやかましかつた生徒達はみんな教場にはいつて、急にしんとするほどあたりが靜かになりました。僕は淋しくつて〳〵しやうがない程悲しくなりました。あの位好きな先生を苦しめたかと思ふと、僕は本當に惡いことをしてしまつたと思ひました。葡萄などは迚も喰べる氣になれないで、いつまでも泣いてゐました。

ふと僕は肩を輕くゆすぶられて眼をさましました。僕は先生の部屋でいつの間にか泣寢入りをしてゐたと見えます。少し瘦せて身長の高い先生は、笑顏を見せて僕を見おろしてゐられました。僕は眠つたために氣分がよくなつて今まであつたことは忘れてしまつて、少し恥かしさうに笑ひかへしながら、慌てゝ膝の上から辷り落ちさうになつてゐた葡萄の房をつまみ上げましたが、すぐ悲しいことを思ひ出して、笑ひも何も引込んでしまひました。

「そんなに悲しい顏をしないでもよろしい。もうみんなは歸つてしまひましたから、

あなたもお歸りなさい。そして明日はどんなことがあつても學校に來なければいけませんよ。あなたの顏を見ないと私は悲しく思ひますよ。屹度ですよ」

さういつて先生は僕のカバンの中にそつと葡萄の房を入れて下さいました。僕はいつものやうに海岸通りを、海を眺めたり船を眺めたりしながら、つまらなく家に歸りました。そして葡萄をおいしく喰べてしまひました。

けれども次の日が來ると僕は中々學校に行く氣にはなれませんでした。お腹が痛くなればいゝと思つたり、頭痛がすればいゝと思つたりしたけれども、その日に限つて蟲齒一本痛みもしないのです。仕方なしにいやゝ〳〵ながら家は出ましたが、ぶらゝ〳〵と考へながら歩きました。どうしても學校の門をはいることは出來ないやうに思はれたのです。けれども先生の別れの時の言葉を思ひ出すと、僕は先生の顏だけはなんといつても見たくてしかたがありませんでした。僕が行かなかつたら先生は屹度悲しく思はれるに違ひない。もう一度先生のやさしい眼で見られたい。たゞその一事があるばかりで僕は學校の門をくゞりました。

さうしたらどうでせう、先づ第一に待ち切つてゐたやうにジムが飛んで來て、僕の手を握つてくれました。そして昨日のことなんか忘れてしまつたやうに、親切に僕の手をひいて、どぎまぎしてゐる僕を先生の部屋に連れて行くのです。僕はなんだか譯

がわかりませんでした。學校に行つたらみんなが遠くの方から僕を見て、「見ろ泥棒の嘘つきの日本人が來た」とでも惡口をいふだらうと思つてゐたのに、こんな風にされると氣味が惡い程でした。

二人の足音を聞きつけてか、先生はジムがノックしない前に戸を開けて下さいました。二人は部屋の中にはいりました。

「ジム、あなたはいゝ子、よく私の言つたことがわかつてくれましたね。ジムはもうあなたからあやまつて貰はなくつてもいゝと言つてゐます。二人は今からいゝお友達になればそれでいゝんです。二人とも上手に握手をなさい」と先生はにこ〳〵しながら僕達を向ひ合せました。僕はでもあんまり勝手過ぎるやうでもじ〳〵してゐますと、ジムはぶら下げてゐる僕の手をいそ〳〵と引張り出して堅く握つてくれました。僕はもうなんといつてこの嬉しさを表はせばいゝのか分らないで、唯恥かしく笑ふ外ありませんでした。ジムも氣持よささうに、笑顔をしてゐました。先生はにこ〳〵しながら僕に、

「昨日の葡萄はおいしかつたの」と問はれました。僕は顔を眞赤にして「えゝ」と白狀するより仕方がありませんでした。

「そんなら又あげませうね」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com